日文教育資料［図画工作・美術］

形

No.293-2010

Forme

平成23年度用
新版「図画工作」
教科書特集号

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

形 Forme
No.293-2010

表紙写真

新版教科書3・4上p6・7
「大すき自分の線と色」より

新版教科書1・2下p24・25
「ならべて つないで つつんで」より

新版教科書1・2下p18・19
「どうぶつさんの おうち」より

新版教科書5・6下p12・13
「どんな動きをするのかな」より

Contents

［巻頭言］
『学習指導要領を視覚化する教科書』ふじえ　みつる　1

［特集］平成23年度用　新版「図画工作」教科書
『新しい教科書の考え方』岩﨑由紀夫　2
内容解説
造形遊びをする
『子ども主体の造形活動を考える』阿部宏行　4
絵に表す
『描くことを楽しみ，描くことで「生きる力」を育む』林　耕史　6
立体に表す
『わかりやすい教科書を目指して』名達英詔　8
工作に表す
『つくる面白さ，生活を楽しく豊かにする喜び』橋本光明　10
鑑賞する
『「見ることを楽しむ」活動へ』大泉義一　12
特設ページ
『子どもたちの感性を刺激して豊かな発想・構想へとつなぐ』水島尚喜　14
『教科書編纂に携わって』　18
『平成23年度用　新版「図画工作」題材一覧』　20
『平成23年度用　新版「図画工作」構造図』　22

［連載］鏃 YAJIRI　24

巻頭言

学習指導要領を視覚化する教科書

愛知教育大学　ふじえ　みつる

新版教科書1･2上 P6･7「おひさま にこにこ」より

平成20年３月に告示された新しい学習指導要領による最初の教科書が，小学校や中学校で平成23年度から使用されます。その教科書には，「生きる力」となる資質や能力を，どのように育むのか，そのために適切な教材とは何かを示しながら，子どもにとって「わかりやすい」，指導者にとっては「使いやすい」ことが求められています。

図画工作科でも同じことが言えます。ただ，図画工作科の内容である「アート」は，「ビジュアル・アーツ（Visual Arts）：視覚芸術」と英米で呼ばれるように，他の教科以上に，学習指導要領で示された理念や趣旨を具体的に図示し，目に見える形や色で提示しなければなりません。

新・学習指導要領での図画工作科の目標は「表現及び鑑賞の活動を通して，感性を働かせながら，つくりだす喜びを味わうようにするとともに，造形的な創造活動の基礎的な能力を培い，豊かな情操を養う」です。例えば，「つくりだす喜び」を味わう子どもの姿をビジュアルに提示し，それを見た子どもたちが「やってみたい」と意欲をもち，その意欲を生かし確かな学力へと高めるために，指導者が子どもの活動を見守ることができるような教科書が求められています。

実は，目に見えない理念やコンセプトを，目に見える形や色で表すことは，古代ギリシアから造形作家の仕事でした。伝説や詩において言葉で伝えられてきた神々の姿を，形や色で生き生きと目に見えるように表したのは彫刻家や画家でした。そうした視覚に置き換えられた図像を通して，人々は，ヴィーナスやアポロンの存在を初めて実感できたのです。キリスト教では，神の姿に似せて人間が創られたとされますが，古代ギリシアでは，人間は自分の姿に似せて神々を創りました。ただ，それらの神々の姿は人間に似ていても，「美」や「知性」といった理想（イデア）の表現です。それは生身の人間とはちがい，現実にはありえない比例（プロポーション）をもち，数学的な規準（カノン）にしたがった姿です。

しかし，教科書の図版で示される子どもの姿は，求めても得られない理想でもないし，かくあるべしという規範でもありません。現実にある等身大（ライフ・サイズ）の子どもの姿です。それは，その題材では，何を，どのように扱ったらいいのか（ノウ・ハウ know how）を伝え，学校や学級で活用していける現実の事例です。ただ，「題材（モチーフ）」というこの教科独自の単元の呼び方は，作家が表現したくなるモチベーションに由来するように，その題材での活動の方法だけでなく，なぜ，そうするのか（ノウ・ホワイ know why）を伝えるための事例でもあります。つまり，事例としての活動を通して，どのような資質や能力を培うのかという学習指導要領で示された基本に立ち戻り，目の前の子どもの姿から指導計画や授業の流れを考えていくために教科書を活用していただきたい。それが教科書の大切な使命の一つだと思います。

新版教科書3･4上 P2「よさを見つけて」より

新しい教科書の考え方

大阪教育大学　岩﨑 由紀夫

感性から始まる学び

新学習指導要領では，教科目標に「感性を働かせながら」という一文が新たに加えられました。これは，自分なりの感じ方やものの見方，直感的な判断力，そしてその育成を重視することを意味しています。

日文 図画工作は【造形活動を通して「喜びを確かな学び」へつなぐ教科書】を目指して編集されています。児童が自分の感じ方で造形活動の喜びを実感し，その実感が学びへとつながっていくことを願っています。そのために，児童の活動プロセスを重視しビジュアル化でわかりやすく見せること，そこから獲得する資質や能力を可視化できることを心がけました。

コミュニケーション活動の充実

言語による活動と，形や色を通した表現および鑑賞の活動で，コミュニケーション活動をより充実することができると考えています。言語活動の充実を図るため，児童の発言，発表や相互鑑賞における話し合いの言葉を誌面に多く取り上げています。従前の教科書よりも文字情報を多くすることで，より理解や伝達が深まることも意識しています。また，形や色，直感的なイメージなどを通したコミュニケーションは他の教科にはない図画工作科独自の言語活動ととらえていますが，高学年では，作品から受けた印象を形や色で表現する題材を設定し，形や色を通したコミュニケーション活動も取り入れています。

新版教科書5・6下P14
「心の中の美術館」より

伝統文化と道徳

我が国の伝承玩具や伝統工芸，世界遺産について触れ，文化を継承していくことや新しい文化を創造していくことの意義が学べることも大切にしています。これらのことは，美しいものに感動する心をもつ，郷土の文化を大切にし愛する，我が国の伝統文化を大切にするなどの「道徳」とも関連し，さらには，自分や友だち，父母や祖父母などを敬愛することにもつながると考えます。

新版教科書3・4上P38・39
「ぞうけいずかん」より
「赤べこ」（福島県）

児童の発達の段階に考慮した編集（中学校との連携の意識化）

低・中・高学年での学習内容や獲得する資質や能力が，連続的に高まっていくように誌面構成を工夫しています。特に，高学年は，中学校との接続をスムースにするべく，誌面のデザインフォーマットを低・中学年とは変えて，スムースに中学校へ意識がつながるようにしています。また，高学年にのみ特設ページ「図画工作の広がり」を設定し，造形活動による他者

新版教科書5・6上P26・27
「図画工作の広がり」より

との交流について触れています。さらには，鑑賞活動に批評的な要素を取り入れたり，表現活動につながる作家作品の鑑賞を取り入れたりするなど，随所に中学校との連携を意識した内容を盛り込んでいます。

情報量を増やすための教科書サイズの大判化

全体を通して，児童の活動プロセスがわかる教科書にするために，情景写真を大幅に増やし，特に創造的な技能にかかわる写真を取り上げるようにしました。児童の思考が見える・推測できるようにするために，情景写真やキャラクターイラスト，作品などに吹き出しをつけ，思考の過程が読み取れることも配慮しています。同じように教師イラストと吹き出しを用いることで，教師の働きかけによる活動のポイントを児童が文章で読み取れるようにしています。

現行教科書（左）と新版教科書（右）

こうした情報量の増加にともない，サイズをＢ５からＡ４変形に大判化。これは，ランドセルやデスクトレーにも合うサイズです。さらに総ページ数も従前の40ページから44ページに増やしていますが，子どもへの負担を考え，総重量が重すぎないように紙質まで配慮しました。

材料・用具の取り扱い

学習指導要領で，材料・用具の取扱いが「第３指導計画の作成と内容の取扱い」の配慮事項へ移行となったのに伴い，活動内容と材料や用具の扱いが簡潔に示されました。そこで，日文 図画工作でも材料や用具の取扱いが造形遊び，絵や立体，工作などの異なる表現に共通する技能として習得，活用できるよう，その扱い方のポイントを特設ページ「使ってみよう材料と用具」にまとめています。題材ページでも取扱い方やそのポイント，安全面の配慮について随所に触れています。

新版教科書5・6上P12・13
「板を切りぬいて」より

〔共通事項〕で育みたい資質や能力の明確化

〔共通事項〕が設けられたのは「育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にする」とともに「領域や項目などを通して共通に働く資質や能力を整理」するためです。そこで，各題材において形や色，イメージなど〔共通事項〕に示された事柄を意識して活動を展開できるように，導入文やくふう，ふりかえりの文章，さらには情景写真を工夫しています。また，すべての学年において特設ページ「形や色を楽しもう」を設定し，造形をもとにしたコミュニケーション能力を育むためのオリエンテーションとしました。

暮らしに根ざした造形活動

生活を美しく豊かにする造形や美術の働きを実感することができることを意識し，特に「工作に表す」ではつくったものを使う，使うことを意識してつくるということを意図した題材設定を行っています。同様に，「絵に表す」「立体に表す」では，表したものを活用して，生活に潤いを与える題材設定も心がけています。さらに，ユニバーサルデザインや人権ポスター，自然環境を生かした造形活動などを通して，福祉，環境，人権問題など，生活の上で考えなければいけない人類の課題に対する問題意識がもてることにも配慮しています。

新版教科書3・4上P8・9
「楽しくつかおう」より

子ども主体の造形活動を考える

北海道教育大学岩見沢校　阿部 宏行

(図1) 新版教科書5・6上P6・7
「風が見えたら」より
活動全体の過程が見えるようにするとともに，一人一人の活動の様子，資質や能力を発揮している姿に吹き出しなども交えて誌面構成している。

「造形遊びをする」ページの基本的な考え方

■「造形遊び」を通して指導することの意味

今回の学習指導要領の改訂では，「材料を基に造形遊びをする活動を通して，次の事項を指導する」として，平成10年の「楽しい造形活動」から「造形遊びをする」に変わりました。また，文末に「指導する」ことが明示されたことで，教師の指導が明確になったことが特徴として挙げられます。しかし，これは造形遊びを通して，子どもの資質や能力を育てることを意図したものであり，教授的な授業をすることを意図したものではありません。

■つくる喜びを味わいながら育つ資質や能力

「造形遊び」は，身近にある自然物や人工の材料，その形や色の特徴などから思いついた造形活動を行うものです。

子どもは，材料に働きかけ，自分の感覚や行為などを通して形や色をとらえ，そこから生まれる自分なりのイメージを基に，思いのままに発想や構想を繰り返し，体全体を働かせながら創造的な技能などを発揮していきます。これは遊びの能動的な性格を学習として取り入れた活動であり，A表現(1)で取扱うこととしています。

また，A表現(1)の各事項の文末が「つくること」で統一されているのは，材料や場所などを基に，つくり，つくりかえ，つくるといった，つくる喜びを味わいながらの連続的な活動の流れを一体的にとらえる観点からです。「つくる」には，「創る」「造る」「作る」という様々な意味が込められています。

これらも「遊び」という原初的，創造的，主体的な性格につながってきます。

■子どもの視点で造形活動を考える編集姿勢

編集に当たっては，「造形遊びをする」の趣旨を踏まえ，子どもがつくる喜びを味わいながら，つくり，つくりかえ，つくる姿などを情景写真やイラストで構成しています。特に，高学年では文章も添え，読んで理解することも意図して構成しています。(図１)

また，子ども同士が相互にかかわり，資質や能力を育んでいる様子を「吹き出し」などで，わかりやすく説明しています。(図２)

「造形遊びをする」は，「材料」「場所」「行為」を軸に，低・中・高学年で体系的に資質や能力が育成されるように編集しています。例えば，低学年の「ひかりの プレゼント」に始まり，中学年の「光を通して」「光でうつし出す世界」，そして高学年の「光のハーモニー」のように，「光」を材料の一つとして，自然光から人工の光源への広がりとつながりを重視しました。

〔共通事項〕については，その趣旨から，〔共通事項〕の題材をつくることはありませんが，どのページも形や色などが明確になるよう工夫しています。

(図2) 新版教科書1・2下P20・21
「ひかりの プレゼント」より
鑑賞の能力を発揮し，見つけた色を友だちに伝えている姿など，吹き出しを効果的に使い，評価に役立つ構成をしている。

（図3）新版教科書3・4上P10・11
「広がれつながれ」より
子どもたちは造形遊びを通じて，形や色などのおもしろさや美しさを体験的に感じ取る。〔共通事項〕は，表現と鑑賞の活動を通して指導する観点となる。

材料や場所に働きかける活動を通して，形や色などが意識でき，「楽しそう」「おもしろそう」「きれい」など，子どもの気持ちに働きかける編集を心がけています。（図３）

また，低学年では，幼稚園との接続，高学年では，中学校への接続も考慮しています。例えば，低学年では，環境や遊びを通しての指導を重視する幼稚園教育を踏まえ，「すなや つちと なかよし」「ならべて つんで」など，体全体で材料にかかわる活動を取り入れています。高学年では，「風が見えたら」「身近な環境を生かして」など，身近な場所や環境条件を生かして，造形遊びを楽しむ様子を伝えています。これらは生活を美しく豊かにする造形や美術の働きを実感させる指導に考慮したもので，中学校へのつながりを意図したのです。

「造形遊びをする」ページの特徴について

■つくる過程で発揮される資質や能力の重視

「材料を基に造形遊びをする」は，結果的に作品になることがありますが，始めから作品をつくることを目的としていません。一方，「表したいことを絵や立体，工作に表す」は，およそのテーマや目的を基に作品をつくろうとすることから始まります。また，「造形遊びをする」は，思いつくままに試みる自由さなどの遊びの特性を生かしたものであるので，「～しながら」という行為の中に，子どものよさや可能性を見取ることが大切です。

■思いを広げる材料や場所などの環境の重要性

指導に当たっては，育成する資質や能力の観点から，活動と材料などの関係に配慮する必要があります。例えば，材料からの発想を豊かにするために，材料の種類や量を豊富に用意することが考えられますし，材料からの発想を深めるために，材料の種類や量を少なくする方法もあります。創造的な技能を高めるためには，材料や用具の経験を総合的に生かすような題材を構成する，体全体を使って長く並べたり高く積んだりできる場所を工夫するなどが考えられます。また，子どもの資質や能力は，活動そのものに現れることが多いことから，活動の様子を写真などの映像で記録し，評価に役立てることも大切です。（図４）

（図4）新版教科書1・2下P10・11
「大きな かみで」より
子どもの活動する場所や材料の準備などとともに，子ども同士がかかわりをもつ場面，材料に体全体で働きかけている姿を，擬音などを使い，その様子を伝えている。

■〔共通事項〕と造形遊び

造形遊びは，一つには，材料に進んで働きかけ，表し方を見つけたり試したりするなどの過程を楽しむ活動，二つには，材料を並べたり積んだりするなどの手や体全体を働かせる活動，三つには，材料の形や色を操作したり場所の特徴を生かしたりするなどの構成的な活動です。

また，〔共通事項〕は表現と鑑賞のどちらにも働く資質や能力です。造形遊びにおいては，子どもが材料や場所から形や色などをとらえ，イメージをもち，次への活動（行為）へと動きだす姿を見取ることができます。

「大きな かみで」では，〔共通事項〕の「材料や場所など」の「など」に含まれる「感触」に着目し，一人一人が思いのままに表現したり，感触を十分味わったりしている姿で構成しています。

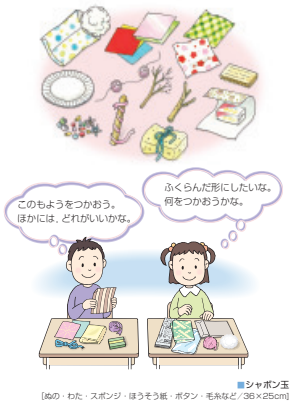
以上のように，教科書を見た子どもたちが「私もやってみたい」「ぼくならこんなことをしてみたい」と，子どもの意欲を喚起する誌面構成を心がけました。

描くことを楽しみ,描くことで「生きる力」を育む

群馬大学　林　耕史

（図1）新版教科書1・2上P17
「ドアの むこうに」より
描くことを通して子どもを育てる。

（図2）新版教科書3・4上P24・25
「あのときをわすれない」より
学びの道筋を示すイラストやテキストを導入。



（図3）新版教科書3・4上P16・17
「ざいりょうからひらめき」より
発想を助ける「つぶやき」。

「絵に表す」ページの基本的な考え方

■「このような絵を描く」から「絵を描くことでこのような子どもに」へ

これまでの教科書では，解説はできるだけ抑えて子どもが描いた絵によって学習内容を伝えようとしてきました。これにより視覚的な魅力と迫力があるページになっていましたが，一方で「このような作品を製作すること」がその題材の内容であり目標であるかのように解釈されてしまう傾向がありました。その「誤解」故に，作品づくりのための偏った指導法をメソッドとして教師が求めてしまう弊害をもたらしたとも言えるでしょう。完成作品だけでなく，どのように思いを巡らし試行錯誤しながら描いたのかという過程にこそ図画工作科学習の大切な意義があります。私たちは，そのことを「絵に表す」題材のページから，子どもたちにも教師にも大切に伝えたいと考えました。

そこで日文 図画工作では，絵を描く過程でどのような学習をし，「どのような力が発揮されることを期待するのか」,「この絵を描くことでどのような子どもに育って欲しいのか」が明確に表明され理解されるような題材開発と誌面構成を心がけています。

「絵に表す」ページの特徴について

■学びの道筋を「子どもキャラクター」のつぶやきやイラストで示す

日文 図画工作では，生活を主題にした絵や想像して描く絵をはじめ，様々な「絵に表す」題材のページにおいて，イラストで登場させた「子どものキャラクター」のつぶやきを載せたり，写真やイラストによる解説を加えたりして，発想・構想や試行錯誤を促しています。これにより，発想の手がかりをどのようにとらえるか，或いはどんな学習の姿を期待しているのかなど，学習のプロセスを教科書から子どもも教師も理解し共有できるようにしています。作品図版と併せて見ることで，例えば授業で，「作者はどうしてこの材料を使ったのだと思う？」などと子どもたちに問うこともできるでしょう。子どもたちは，教科書を見ながら，自分の発想・構想の姿勢と重ね，「自分だったらこうしたいな」と考え答えていくことができます。こうして，「私はどんなふうに描こうかな」と主体的に題材に向かう姿勢が生まれ，自分で筋道を立て，自分のやり方で試行錯誤していく学習へといざなっていくのです。その他，形や色に注目できるようなヒントや，材料や用具を扱う時のポイントを，情景写真や付随する「吹き出し」の言葉でわかりやすく示しています。（図２）（図３）

■造形によるコミュニケーション活動や共同の造形活動を導入

新学習指導要領は，造形体験における形や色などによるコミュニケーションを通して，生活や社会と豊かにかかわる態度を育むとともに造形や美術の

（図4）新版教科書1・2下P30
「みんなの おうち」より
自他の表現のよさを感じ取り合う「鑑賞」。

おすしがすきなうちゅう人 [27×38cm]

（図5）新版教科書3・4下P6・7
「すてきなペーパーショップ」より
友だちの作品の中に自分がつくった紙が使われている。

（図6）新版教科書5・6下P14
「心の中の美術館」より
鑑賞と表現のリンクを試みた題材。

働きを実感できるようにすることを，その改訂趣旨の一つとしています。ここでいうコミュニケーションは，形や色，直感的なイメージをツールとして友だちや社会と交流するという広い意味をもちます。即ち，言葉によらないコミュニケーション活動も大切に位置づけようとしているのです。これは「指導計画の作成と内容の取扱い」でもふれられている「適宜共同してつくりだす活動」にも結びつきます。ただし従来行われてきたような，作業を分担することで進める「共同製作」としてではなく，子どもたち相互が自分の表現を展開しながら刺激し合うことによって新たな意味や価値を創造していく活動となります。これは，自他の表現のよさを感じ取り合う「鑑賞」の活動とも重なり，作品を味わう活動の中で批評し合いながら次の表現へと活動が往還しながら高まっていくのです。

例えば「すてきなペーパーショップ」（3・4下）では，自分の方法でつくった多様な色や模様の紙を，友だちと交換・分配し，一人一人がそれを用いたコラージュをつくります。この題材で，自他の紙のよさや美しさを「お店屋さんごっこ」で自然な批評活動を通して感じ取り合うことができます。完成した作品には，自分の他に友だちがつくった紙も使われていて画面のなかに存在していることから，自分だけでなく，友だちがいたからこそつくり上げることができた価値を感じ取ることができます。形や色を手がかりにしたやりとりと表現により，新たな意味や価値を創り出したり共有したりするという，自己表現と社会にかかわる態度を育んでいこうとしているのです。（図4）（図5）

■「絵に表す」ことで鑑賞と表現を一体にする題材も紹介

日文 図画工作では，絵を鑑賞して感じ取ったよさや美しさを「絵に表す」題材も提案しています。発言や感想文ではなく，「絵に表す」という形でアウトプットすることで，鑑賞と表現が様々な点でリンクし関連しながら展開する活動が実現できます。例えば「心の中の美術館」（5・6下）は，古今東西の親しみやすい名画を見ての印象を，形や色を手がかりにして表現方法を自分なりに工夫しながら描いて表す活動です。言語を介して作品を鑑賞するだけではなく，言葉によらないコミュニケーションとしても成立します。同じ絵を見ても，人によって感じとった印象や表し方などが違うことから，自他の表現のもつ意味や価値についての思いも深めていくことでしょう。その他，それぞれの題材において，製作の途中や完成後に自他の作品を見合うことで，さらに表現を豊かにしていくような鑑賞と表現の一体化を提案し位置づけています。（図6）

思考・判断して表現できる子，自他のよさを感じ取れる子を

「絵に表す」活動は，単に「絵」を描くことや「作品」をつくることが目標ではありません。絵を描くことを通して，自分で思考・判断して，試行錯誤しながら自己表現できる自律した子を育てるとともに，自他のよさを感じ取り尊重し合いながら社会を築いていこうとする素地を育んでいくのです。まさに，今求められている「生きる力」です。日文 図画工作が，子どもたちを「絵」や「作品」の向こう側にまで導いていく案内役になることを願っています。